



ジェームズ・ユーラク氏インタビュー 「近代的な」江戸絵画について

視覚芸術に長けた欧米の人々が、宗達を始めとする江戸時代の美術を見て、「なんて近代的な表現だろう。現代のような技術がなかった時代に、なぜこうした作品を作ることができたのか」と言うのをよく耳にする。こうした発言がなされる背景には、人間の知識は直線的に進歩してきたのだという思い込みがある。

私の考えでは、宗達を含め、江戸時代、あるいはそれ以前の人々は、おそらく私たちと同じような着想を持ってはいたが、それを実現する技術がなかっただけだと思う。日本には、《色紙貼交屏風》という一連の屏風がある。美しい自然風景を描き、その中に和歌をしたためた色紙を複数貼り込んだものだ。色紙に和歌の文字のみを書いたものもあれば、華やかに装飾したものもある。私がそうした屏風を初めて目にしたのは、1980年代のことだ。ビル・ゲイツがWindowsを発表し、スティーブ・ジョブズがコンピュータで試行錯誤を繰り返していた時代である。両者の共通点は、画面の中に別の小さな画面がある、入れ子構造であることだ。

もし宗達が現代の技術を使えていたら、ズームインやズームアウトが自在にできる、コンピュータの大画面のような作品を作ったのではないかと想像する。人間は生来、物事を多様な視点から捉える想像力を持っているというのが私の持論だ。

(中略)

視覚芸術を生み出す際、気持ちに技術が追いつかないことがあると思う。4~5世紀前の人々が持っていた知識は、現代の私たちには遥かに及ばず、同じような感情を味わってはいなかったのだと想像することがあるかもしれない。それを覆すのが美術館という場所だ。作品の前に立ち、あらゆる解説や書物、百科事典を取り払い、作品そのものと対峙して、「人の手がこれを作り上げたというのか。どんな人が作ったのだろう。何を見て、何を考えていたのだろう」と思いを巡らせる。すると、過去の人々を、昔の人だからと矮小化する考えを手放すことができる。作品は

今もここに存在しており、それを作り出した誰かの手がすぐそばに感じられる。その人とつながり、ゆったり眺め、「あなたは誰？ これを作ったとき、どんな気持ちだった？」と問いかけてみてほしい。

"Interview with Jim Ulak." Hoaglund, Linda, dir. *Edo Avant Garde*. 2019; United States; Japan. <https://www.edoavantgarde.com/> (ジェームズ・ユーラク氏インタビュー 出典:リンダ・ホー



作者不明 《屏風尽図屏風》(部分) メトロポリタン美術館